
reko-do

からすま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

rek-o-d-o

【コード】

N0209H

【作者名】

からすま

【あらすじ】

雨宮由美子、10歳。東京のとあるマンションで元使用人・峰山と暮らす元お嬢様である。彼女は、最近、幼少期の日々の夢を見るようになる。忘れたはずなのに、なぜ今頃になって・・・？しかし、その夢はこれから始まる『死の試練』のほんの序章にしか過ぎなかった。様々な心の闇を抱えた者達が掲載されているリスト『レコード』。死神界に帰るためそのリストに載っている人間に『死の試練』を与えるように命令された人間界慣れした死神が平凡な女子大生・笹木郁に取り憑く時、試練は始まる。

第零話〜第一話（前書き）

大学のサークルで書いた小説2号です。1号はそのうち……。初心者な私が書いたものでいろいろご勘弁ください。この物語は、笹木郁に取り憑く死神と試練に合う人間の物語。（あと、髑髏さんも）この作品が進むにつれ、残酷な描写があるかもしれません。

第零話 第一話

rekodo

第零章 二〇〇八年五月四日午後五時

これは、彼女が高校三年生の春の出来事である。
ある晴れたぽかぽか陽気。

オレンジ色の夕日が天高く昇っている頃。

緑道からは、川が見え白い鳥達が水辺を優雅に泳いでいる。
そんな中、夕焼け色に染まった緑道を歩く彼女がいた。

現在の彼女の服装は、夕焼けでオレンジに近くなっている赤色の
リボン、白いシャツの上から紺色のブレザーを羽織り、下に黒と灰
色のチェックのスカートと膝上まで身につけている。

どうやら、服装的に学生のようだ。

彼女の名前を笹木郁^{かおる}。

腰まで届きそうな栗色の髪と琥珀色の瞳が特徴的少女である。

滝山町の住宅街から離れた山の中にある私立滝山高等学校に通う
女子高生だ。

現在、学校から家までの下校中だが、彼女と同じように歩く人は
いない。

つまり、彼女だけが歩いている。

(はあ。疲れた)

彼女は息を吐くと、肩からずれそうな黒い色のポストンバックを
持ち直した。

そう、現在、彼女は疲れているのである。

今日の授業は、彼女の好きなテニスだったが、動きすぎて右腕が
筋肉痛になっており動かすだけでも辛い。

一刻も早く帰りたいため彼女の足のペースは、やや早歩き。

筋肉痛でなかったら、もっと早く歩けるはずなのに、いたしかない。

（帰ってから宿題なり、しないといけないしなあ。）
よりによって、この疲れた時に数学と英語の宿題がでた。
二つとも彼女が嫌いな教科である。

だから余計にめんどくさい。
（本当は、帰って風呂入ってから寝るのがベストなんだけど、そうもいかないしなあ。）

二つの教科は、明日もあるし、提出物がうるさい先生なのだ。
（あー。めんどくさい。誰か変わりにやってくれないかな。）
彼女は、本日、二回目のため息を付きながら思った。

そう思うといつもの美しい風景が憂鬱にさえなってくる。
さつきから風も強くなり木々が揺れているし、空も曇ってきて夕焼けがすっかり隠れてしまった。

まるで彼女の今の心を表しているかのような。
はたまた、何かの予兆を示しているような。

（嫌な感じ。さつきと帰ろう。）
彼女は疲労困憊のはずだが、気力で歩く速度を少し速めた。

運命の時間まで、すぐ、そこ。

ザッ。
ザッ。

そのとき不意に彼女の耳に、靴が土を踏む音が聞こえた。

ザッ。
ザッ。

初めは、向こう側から誰かが歩いてくるのだと思っていたので、それほど気にしなかった。

しかし、彼女の耳にその音がはっきりと、聞えた時だった。そいつを視覚で捉えたのは。

ザッ。

ザッ。

突然、彼女の体内が緊張し、額に浮かんだ汗の粒が、つ、と流れた。

緊張と苦痛のため肩で息をしながら、彼女は、ぱちっと、瞬きした後、再びそいつを視覚で捉える。

茶髪の髪と瞳。そいつの前髪は、少し、うねっているが目までかかっている。

表情をよく見ると、薄紫の唇。青白い顔をしていて、そいつから生気を全く感じられず、まるで死人を思わせるような顔をしていた。服装は、普通のサラリーマンが切るようなスーツを着ているのに、なんだかそれさえも外見のせいで不気味に思えてくる。

(うつ。)

彼女は思わず右手で口元を押さえた。

(なんだか吐き気がする。)

彼女が視点を地面に移したときだった。

そいつが喋りかけてきたのは、

「よう。俺が見えてるのか？」

そいつが喋りかけた時、そいつの薄紫の唇が釣りあがり、それと同時に彼女の背筋に悪寒が走る。

(見えるに決まってるでしょ。何。こいつ。気味悪い。なるべくかわりたくなかったのに……。)

「ふーん。見たところ女子高生か……。」

そいつは、彼女をジロジロ見てくる。

「・・・私。急いでいるので。」

彼女は、無視して、そそくさと、行こうとした。

「待て待て。・・・まいいか。お前に取り憑こう。幸い俺様の存在が見えるみたいだし。」

そう言っただけで彼女にとって訳の分からない事を話し、そいつは近づいてくる。

「はあ？」

彼女は、後ろに一步下がりがりながら、首を横に傾ける。

(見えてて何が悪いの?)

そいつが、右手を上にとげると、

パチッ

パチッ

突然、体に白い電流が走った。

さほど、電流で痺れる訳では、なかったが、いい者ではない。

彼女の意識は、ここでぶつりと、消えた。

くるりっ

くるりっ

ここで、彼女が死んだわけでは、ございません。

今、彼女が死ねば、まだ物語りは、序章にしか過ぎないのに、終わってしまいますからね。

彼女は、意識がないだけです。

皆さん、ご安心を・・・。

彼女の意識が眠っている間に、この物語を少しだけ紹介しましょ

う。

私の名前は、妖精どくる。

姿は、残念ながら人間には、見えません。

だから、姿は、ご想像におまかせします。

私は、ある死神に仕える者です。

まあ、こきつかわれている方が、正しい気がしますけど・・・。

私のマスターは、死神界一、最強と言われている方ですが、性格が・・・。

やたら、俺様気取りだし、えらそうだし、優秀な頭脳が別の方に使用されている事が多いですね。

マスターは、昔に、死神王と言われる偉大な方に悪戯しまして、反省として、能力を半分と、人間界に追放されてしまいました。

マスターにしてみれば、規律の厳しい死神界は、窮屈で人間界の方が、誰もマスターを止めれる人がいなく、きままな人間界の方が気に入っているようでした。

おかげで最近、人間界になじんでますし（笑）。

ある時、死神王の使いが地上に降りてきて、こう言いました。

「最近、心の闇を抱えた地獄に落ちてくる人間が、多い。最近の人間どもは、軟弱すぎる。地獄にいる者達は、使えるものがおらん・・・。そこで、お前に死神界に帰るチャンスをやろう。心の闇を具体化した恐ろしい『死の試練』を与え、人間共に天国へチャンスを与える。」

マスターは、なぜこの件を承諾したのか私には、分かりません。

だって、地上生活の方が気に入っていますし。

何か、含むところがあったのでしょうか。

しかし、ここで問題が・・・。

マスターは、人間界に追放されるとき、力を半分、失いました。力が半分、ないんです。

人間に取り憑く事で力が一時的に戻る事を知り、なぜかマスターの姿が見えている彼女に偶然、取り憑いてしまいました。

そう、彼女は、被害者。

マスターが取り憑く限り、この先、ごたごたに会うに違いありません。はたして、どうなるのか……。

それは、わからない……で……す。
あつ。

そろそろ、彼女の……意識が戻つ……たようです。

ど……うやら、私が・喋れるの・は、ここまで……。

次、会え……るのは、一年・後。

よっ……て、物語……も一年、進み……ます。

で・は、これ……で……。

第叁章 夢〜雨宮由美子1〜

さらに一年後の東京。

東京の街中にひとときわ大きいマンションが存在する。

一階は、駐車場や住人達が集うロビーや貸し店舗になっていて、実際、住人達が住むのは二階からになっている。。。

各部屋の広さは、4LDKで、バスルームと、必要な家具、なぜか各部屋、テレビ一台付き（もちろん地デジ対応）。

マンションの値段は、やや高めで不景気にもかかわらず、現在の所、空き部屋はない。

そんなマンションに彼女、雨宮由紀子もマンション三階、三一号室に住んでいた。

ただ今の時刻は、午前七時二分。

この部屋の住人、銀色の髪の少女＝雨宮由美子は、まだ部屋の中のベットで夢の中にいた。

最近、嫌な夢を見る。

森の中の古い洋館の、とても昔の夢。

できれば、今になって、思い出したくなかった……。

バシッ。

「お前は、なんて事してくれたんだ。この恥じさらしが。」「
満月の夜。」

山奥にひっそりとたたずむ洋館がある。

その場所は、洋館の二階、西洋風なカーテンで月の光が届かない
真つ暗な部屋だった。

今、目の前に小さな少女の目の前には父親がいた。

父親は、顔を真つ赤にさせ、右手を上げると、小さな少女の右の
頬を力強く叩いた。

「……………」

殴られた少女の右頬には、赤い跡が残る。

少女は、殴られた所を右手で押さえながら、灰色の瞳に涙を浮か
べ、顔をうつむいた。

「いいか？雨宮家の人間は、明治から続く優秀な人間が集まる家
系だ。なのに、お前は、いつも、いつも、失敗ばかり。どんだけ、
わしに恥をかかせば、気がすむんだ！」

少女の家は雨宮とって明治から続く古い家系。

古くから優秀な政治家を輩出して来た名門一家だ。

少女、雨宮由紀子も雨宮家の一人。

雨宮家に生まれたからには、優秀な人材を育てようと、教育方針
も厳しい。

少女は、昔から何をするのも不器用で、失敗が多い分、昔から親
に厳しく躾けられていた。

今日も、雨宮家の主催のパーティにて、来賓のゲストに挨拶しなければいけない所、少女は、挨拶途中、横から走ってきた子供にぶつかり、こけた拍子にテーブルに置いてあったジュースを来賓の服にかけてしまった。

おまけに、横から走ってきた子供もお得意様の企業の会社の息子。少女は、不運が重なり、パーティが終わるなり、何もない部屋に父親に連れてこられ今に至る。

(・・・ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。)

おかげで父親に恥をかかせてしまった。

あの後、来賓の方々にどう対応したんだろうか。

怒って帰ったかもしれない。

少女は、自分のせいで雨宮に泥を塗ってしまった事を後悔していた。

「とにかく、一週間。ここから一步も出るな。食事は、ここに持つてこさせる。ここで、反省しろ。」

ばたんっ。

父親は、勢い出ると、部屋から去った。

一週間、少女にとって悪夢の日が続いた。

外にも出れない。

家を自由に歩き回る事が出来ない。

話し相手もない。

「ごめんなさい・・・。」

少女の小さな呟きは、誰にも届かなかった。

「お嬢様っ。」

誰かが呼び声がある。

「お嬢様。起きてください。」

彼女が目覚めると、自分の部屋だった。

(よかった……)

悪夢が終わった事に彼女は、ホッとした。

「おはようございます。……また、あの夢を？」

彼女のベットを心配そうに覗くのは、彼女の家の人だった男。名前を峰山。

外見は、白髪が目立ち、顔には、白い髭があり、温厚そうな初老の人物だった。

彼女を地獄の家から救ってくれた人だった。

「……うん。隠し事できないな。峰山には。」

ちなみにあの夢は、毎日、繰り返される。

最初は、何でもないように取りつくるっていたが、毎日、うなされてる彼女を見て、おかしい事に気がついたらしい。

洗いざらい彼に事の顛末を吐かされたのだ。

「そりゃあ。だてに使用人やってたわけでは、ないですから。隠し事は、なしですよ？由美子様。」

彼は、にこっと、彼女に微笑みかけた。

(なんだか、脅しているように見えるのは、気のせいかな?)

「わかったから。それより、おなかすいた。峰山、朝食はできてるか？」

「ええ。できてますよ。……ですが。」

彼は、突然、ため息をついた。

「……どうして、亨が朝からいる？しかも、食べてるし。」

私は、まだ食べてないんだけど……。郁ちゃんの所で食べないの？」

リビングには、一足先に来客がいた。

彼の名前を山脇亨^{やまわき}。

彼女の部屋の上の階に住むマンションの住人である。

漆黒の瞳と、髪。

今日の彼の服装は、

ちなみにリビングのテーブルは、四人用。

彼女の使用人が作った料理が所せましと、並べられ、それを彼は、食べていた。

「昨日から郁ちゃんが口利いてくれないんだ。俺、何かしたのかな。おかげで家も入れてくれないし・・・。」

亨は、料理が苦手なようで最近引越してきた隣の部屋に住む郁にご飯を貰いに行ってるらしい。

「だから、それは、亨が郁ちゃんに何か言ったんじゃないのか？・・・で、それが、なぜうちにいる事につながる？」

彼女にとって、はた迷惑な話である。

「まあ、気にすんな。あつ。もうすぐ、仕事の時間だ。じゃあな。」

彼は朝食を食べ終わると、椅子から立ち上がり、そそくさと玄関に行き、部屋を出た。

「・・・結局、はぐらかされたし・・・。あんなのが、話題の俳優なんて、全国の女性の皆さんは、彼の私生活を知ったら、悲しみますよ・・・。」

彼女は、椅子に座ると、朝食を食べ始めた。

「しかたないですよ。彼は、テレビと、だいぶギャップがありますからね。知らないほうが、幸せなのかも、しれません。」

峰山は、カップに紅茶を入れながら、答えた。

「この分じゃあ、郁ちゃんは、毎朝、大変ですね。」

ただいま午前七時半。

「あつ。おはようございます。由美子ちゃん。峰山さん。」
彼女の名前は、笹木郁。

彼女の部屋の上の階に住む栗色の髪と琥珀色の瞳が印象な女性である。

ちょうど、大学に向かう所だったらしく、駐車場にあるゴミ捨て場ではったりと出くわした。

「おはよう。・・・それより、郁ちゃん。どうして、亨と喧嘩したんだよ？おかげで優雅な朝食が台無しにされただけど・・・。」
彼女は、不機嫌そうに話す。

「へ？あいつ、由美子ちゃんの部屋にきたんだ。ご愁傷様。」
郁は、悪びることなく、にこりと笑った。

「ちなみに、喧嘩したんじゃない、昨夜は入れないようにしてみたんだ。いつも、家の中いれたくないし・・・。たまには、優雅に食事させてほしいし。」

「どうやら、郁は、彼女なりに苦労があったようだ。」
「だからって、困るのだが・・・聞ってる？郁ちゃん。」
話している途中、別の事に気がいった郁に、彼女は怪訝そうに聞く。

「いけないっ。もう行かないと。じゃあね。由美子ちゃん。」
当の郁は話の途中で時計を気にして、時間がないのか申し訳なさそうに言うと、背を向けて歩き出してしまふ。

「いつてらっしやい・・・。」
彼女は、背を向け歩き出した郁に聞えるように、送り出す言葉を告げる。

（はあ。破天荒な双子だなあ・・・。）
さすが血のつながっている同士、自由でよくつかめない所は似ている気がした。

（たくっ。）
彼女は、マンションの入り口の方向に視線を送る。
本人はばれてないと思ってないのか。

さつきからこちらを伺うようにちくちく視線を送る人物に溜息をつく。

「・・・行つたみたいだよ？あんたの片割れ・・・」
彼女がこちらに気づいた事を知ったのか、おそろおそろその人物はこちらに近づく。

「正確には血がつながってるけど、今は別々の籍にいる元双子だ。しかし、怖かった」。相当、根に持つてるよ。どうしよう。」

ずどーん

本人は相当ショックだったらしい。
とても慌てている様子。

「俺にしばらく飯なしで生活しろって言うのか??？」

(落ちこむとこそこか・・・っ。)
訳が分からない。

(だいたい一人暮らしなんだから自分で料理してくれ。)

峰山はにこにこ亨に料理を出しそうだが、峰山の負担が増えるのも確実。

「どうか。とりあえずうちだけは却下だからね。それと、私だけではなく春日まで巻き込まないでくれ。困ってるんだろ。」

彼女は、さつきから亨の横でおろおろと二人を見ている人物に視線を送る。

おそらく亨に付き合わされて、彼女と郁の会話を見ていたのだろ
う。

「・・・」

彼は亨と彼女に『二人とも喧嘩はだめだよ？』と書かれた首に紐でかかっているボードを向ける。

「えー。峰山さんの料理は美味しいのに。なんでー？」
亨は納得いかない様子。

「なんでって、峰山が大変だろ。これ以上、負担かけて倒れられたら困る。」

ちなみに10歳と18歳の会話である。

一応、10歳と若い容姿の彼女に言い聞かされている18歳って
どうよと、彼女は突っ込みたい所だが、そこはあえてスルーして頂
きたい。

「だったら、お前だって料理しないの？お嬢様は辞めたんだろ？負
担掛かってる事になってる気がする。」
どきっ。

凶星だった。

(今の私は……)

峰山はもう年相当の年代。

いつ、どうなるかなんて分からない。

(……峰山のお荷物だなんて、昔からだよ。)

なにも言い返さない彼女の様子になったのか、

『亨、言い過ぎ。』と書かれたボードを亨に向ける彼の表情は、
・怒りが含まれていた。

亨は彼のボードに書かれた内容を見て、「……ごめん。・
俺も人のこと言えないな。」とぼそっとつぶやく。

ただならぬ空気が流れてきたので、「とにかく、郁ちゃんと仲良
くしてね?」と言って、彼女は入り口に向かって歩き出した。

「あいつが雨宮由美子……か。」
彼女は知らない。

遠くから彼女を見ていた黒い影があった事を。

「……今度はあいつね。果たしてどうなるやら。せいぜい楽しませ
てくれるといいんだが。俺様は今、暇でしかたがないからな。」

影は口角をを釣り上げと、どこからともなく巻物を取り出すと、
巻物を広げた。

巻物には、文字が並んでおり、ある部分の文字だけ紫色に光って
いる。

そこには、『アマミヤ ユミコ』と書かれていた。

「しかし、おもしろい。あいつまでいるとは・・・な。まあ、笹木郁が住んでいるマンションだしな。おっ。おでましか。」

影は巻物を畳むと、こっちに気づいて走ってきた人物に愉快そうに視線を送る。

「お前・・・郁じゃないだろ？死神か。」

その人物は先程の子供っぽい表情とは違い、目が細められ無表情。声も先程とは違い一オクターブ低い。

「・・・ご名答。久しぶりだな・・・亨。」

くるりっ。

くるりっ。

ごぶさたです。

死神に伝える妖精どくろです。

またまた、彼女がマスターに乗っ取られたので、できませんでした。

さて、物語は、一年後。二〇〇九年五月四日。

現在に突入しました。

今回の主人公は、雨宮由美子さん。

とあるマンションに住む訳有なお嬢様です。

前回の主人公は、って？

ふふ、この物語は、主人公が一人と言う訳では、ありません。

主人公は複数いて彼女は、その一人に過ぎません。

ですが、主な主人公は一応、郁ちゃんです。

この物語に所々、出てきて、鍵となる人物の一人です。

なんせ、マスターが取り憑いてますから・・・。

さて、最後にマスターが何か訳分からない事、言ってますが、こ

ここで私が解説をしますね。

マスターが読んでいた巻物は、『レコード』と言って前回、話した『死の試練』を該当する者達が掲載されているリストの事です。死神王の使いがマスターの所にやって来た時に貰ったそうです。彼らは、深い『心の闇』を持っていてある日、突然ささいなことで、それが表にでてきてしまいます。

そうなった時、『レコード』と呼ばれるリストに載っている該当人物の名前が紫色に浮かび上がるのです。

今回の場合、夢でしょうか・・・。

ちなみに一年経った間にも、何人か『死の試練』受けてます。

克服した人は、一人のみ、ですが・

さあ誰なんでしょうねえ・・・？

それほど険しい試練なのでしょうが。

わかりません。

だって、まだ始まったばかりですから。

つづく

第零話〜第一話（後書き）

こんな作品ですがよろしくおねがいします。

第弐話 お嬢様の挑戦（前書き）

前回から時間がかかってすみません。時間がかかったぶん、これから投稿しようと思います。よろしくおねがいします。

第三話 お嬢様の挑戦

それは、よく晴れた日曜日に起こった。

今の時刻は、午前八時半。

雨宮家は、というど。

「だからおとなしく寝ろよ。後は、私にまかせて、さ。」

「そもいきません。すべては、じいにおまかせください。・・ごほつ。」

朝から雨宮由美子とその元・使用人・峰山が言い争っていた。いや、元お嬢様と元使用人の攻防と言った方がただしいか。どうやら両者共引けないようである。

「しかし、お嬢様にそのような事を・・。」

「・・・つ。うるさい。私が洗濯物を畳んだっていいどろ。私だつて、それくらい・・。」

右から小柄な印象の少女の名前を雨宮由美子と、言う。腰まで届くまっすぐな栗色の髪と灰色の瞳。その灰色の瞳は、不安げに揺れていた。現在彼女は、明らかに体調が思わしくない峰山の変わりに家事を行おうとしている所である。

その隣にいるのが、元雨宮家の使用人・峰山は白髪初の容姿。峰山の仕えるべき少女は、一度言い出したら、聞かない、ゆずらないと癖のある人物。彼女の不器用さが発揮される前に慌てていた。

「だから、あのう・・。」

(そうにもいかないのですが・・。)

「・・・ううつ。どうしてこう、うまく畳めないんだろ。」

彼女はいつものまにやら、峰山の変わりに洗濯物を畳もうとしているが悪戦苦闘。彼女が着ていたと思われる水色のティーシャツやスカートが無残にもしわくしゃになり、床に転がっていた。彼女は、それを見てため息をつく。

「由美子様、だから私が・・・。」

慌てて峰山は、ふらふらになりながらも洗濯物を畳もうとするが、
「だ〜から。私がするの!」

彼女は、鋭い目でにらみ、洗濯物を素早くひったくった。

そんな彼女の様子に峰山は安心するはずもなく、はらはらと見守
っていた。

(本当は、このじいちゃんがやったほうがはやいのですが・・・。だいじょう
ぶでしょうか)

あれから、彼女は峰山に変わりに家の掃除、料理・・・としよう
としたが、失敗ばかり・・・。

生まれてこの方、お嬢様として育った彼女には家事は初めてで、
いつも誰かにやってもらっていた。

じぶんから何かしようとするが、そのたびに失敗してしまう。

(その度に落ち込んで・・・。いつも峰山に励ましてくれたっけ?)

あの時も・・・。

舞台は、彼女の回想により、彼女が五才の頃に戻る。

兩宮という家柄に生まれた自分は、今の党首夫妻には、彼女以外、
子供が生まれなかった。そのため、彼女が次の後継者候補。周囲か
ら期待の目で見られる。

しかし、昔から不器用さは付き物。

「あーあ。後継者があれじゃあねえ。」

「いつかつぶれてしまうわ。」

失敗するたびに、ため息・怒声はかえって逆効果。彼女の心を蝕
み始める。

じくじく

しまいには周りの者は自分を見ようとしなくなり、まるで自分が醜
い異物になったような軽蔑した眼で見られるようになるまでに、時

間がかからなかった。

（だったら、初めからそんな期待した眼で見ないで。勝手に期待して。落胆して見捨てる。人間って、愚かな生き物。）

ここは、自分を見てくれる人なんていない。うわべっつらな人間ばかり。誰もが、仮面をかぶっているの。何もしらないくせに。

だから、彼女を支配するのは、絶望感とどこかしさ。

この気持ちを誰に伝えよう。だれがわかってくれる？

五才の少女には、とても耐えられない仕打ちだが、雨宮家は、関係ない。明治から数々の優秀な人材を送り込む名門一族。たとえ小さい幼くても、容赦がなく。小さいころから英才教育が施される。

そうして、将来有望な人材を政治家・音楽家・評論家等を送り込む。だが、優秀な人材を送り込む半面、将来、雨宮の名を傷つけると判断された人間は、消される。雨宮家専属機関の暗殺隠密部隊によって・・・。

このままでは、自分はいずれ、

ケサレル

存在そのものが消えてしまっただろう。

でも、なぜだろう。

最近のじぶんは、そうなったほうがいいと思うようになってきた。自分は失敗しかしないから、周りに迷惑をかけてしまう。

きっと、自分は

誰からも

ヒツヨウトサレナイ

ニンゲン

(でも、峰山だけは違う。)

自分を励まし、人間扱いしてくれたのだ。

(峰山には感謝している。私をいつも助けてくれて。でも、今の私はお荷物になっっている。ただ恩返しをしたいだけなのに……。)

「こんにちは、郁ちゃん。」

彼女は考えた末、同じマンションに住む笹木郁という女性の部屋に来ていた。

「こんにちは、由美子ちゃん。」

郁は、にこっと彼女に笑いかける。

「お願い私に協力して。ね？」

「えーと……。」

どこから突っ込むべきか、突然、彼女に真剣な顔でがしつと、腕を掴まれた。もはや、逃げ場はないのか。こんな10歳の少女に押し負ける私って、もしかして情けない？彼女は、困惑中。頭がショート、5秒前。5・4・3つて、なに数えている私。

「峰山が風邪で寝込んだ。だから、料理教えて……。」

彼女は、うつむいており、下からのぞきこむと真っ赤に染まっていた。

確かに郁は、幼いころから料理を仕事の遅い両親の代わりに作っていた。料理に定評があると、ついっ、もっと勉強したくなるわけで、めきめきと上達している。おかげでだれかさんには頼られる日々なのだが……。

日ごろから妹のようにかわいがっている少女だ。まあ、力を貸してもいいか。

「いいよ。峰山さんには私もお世話になっているし。」

その瞬間、彼女の眼がきらっと輝く。

「さすが、かおるちゃん。話がわかる。」

(ふふ　っ。喜んでゐる。さっきまでの落ち込んだ顔は、無くな
ったみたい。)
「そうと、決まれば、買出し行くよ。」

続く

第参話 買い物に行く前に（前書き）

前回の続きです。今回から新キャラ登場です。肝心の料理シーンがなくてすみません。いつか番外編で・・・。

第参話 買い物に行く前に

ぐいつ。

「ほら、そうと決まれば、行くよ。」

そう言つと、目の前の人間は、彼女の腕を引く。

「ちよつと、お金は、峰山がすべて管理しているのに、どうしろつて言つんだ。買い物は、却下だ。」

残念ながら、彼女は一銭もお金を持っていなかった。

お金がない今、買い物に行くのは不可能で……。

「そうなの？でも、私が小学生の頃は、おこずかい貰つてたよ？・・それじゃあ、しかたない。この郁さまが日ごろお世話になっている峰山さんのためにお金を出すとしよう。」

ふふんつ、と郁は得意そうに言う。

もし、ここに郁の隣の住人がいれば、いったい誰のまねしてるんだ？ と、つつこむだろう。あいにく、今日は仕事が入っており、いない。

「じゃあ、お金持つてくるから、待つててね。」

ぱたんつ。

郁は、ドアを開け部屋に入つて行つた。

「あーあ。郁ちゃん、張り切っちゃつて……。お人よしだなあ。」

(そこが、いい所なんだけど。)

ぱたんつ。

「さてと、そろそろ始めないと……なあ？」

ドア越しに靠れた其れは、そばで控えていた闇に向かつて、にいつと、口角を上げた。

「・・・なあって、言われましても。単にマスターが今の状態に飽きたからだ。」

ぼそぼそと、小さな声で話す闇は、其れに財布を渡す。

「くくくつ。わかっているじゃねえか。おつ、時間だ。そろそろ、物語を進めるか。」

財布を受け取った其れは、静かにドアを開けた。

がちやつ。

「おまたせ。今度こそ、行く。」

ドアを開けた郁とともに、買い物をするべく、これからスーパーに向かう。今まで、峰山に連れられて来たことは、ある。初めてスーパーに来た時は、新鮮さに驚いたものだ。

(だが、何か忘れてそうな気がする。)

財布を持ち、準備万端な彼女らだったが・・・。

(何か重要な事を・・・)

考えてみよう。彼女は、元々、料理を教えてもらえないか、郁に頼みに来た。よって、すぐ買い物をするためではない。このまま、あっさり、近所のスーパーに行つていいのだろうか。

「・・・」

しばらく、考え事をして、眉を寄せ始めた彼女に郁は気がつかないはずがない。

「どうしたの？由美子ちゃんってば。何かつわの空だけど・・・まだ、気がかりでもあるの？」

「ここまでできて・・・」

気がかりは・・・

今、彼女の脳内に青い雷鳴が鳴った。

「うわああああああああ。大変だあああああ。」

彼女は、顔を真っ青になり、両手を頭に置き、ご近所の住人の迷惑も忘れて叫びだした。

「ど、ど、どうしたの？由美子ちゃんってば。うつつ。」

突然の大声に郁の頭は、きーんと脳内に響いる。このとき、郁は、ただ事ではないことを感じた。

「すっかり忘れるところだった。このまま買い物に行けば、峰山は、家中探し回り、いかにも高熱、体がふらふらにもかかわらず壁をはいつくばりながら私を探すことになる。家中にとどまわず、マンション中を探し周ることに……。きつと、再開するころには、病院のベットに決まっている……。それから……。になつて……。で……。。」

と、彼女は、ぶつぶつと、おもわず意識が遠くなりそうな長いセリフをしゃべっている。

そんな彼女に、郁は、

「おい。由美子ちゃん、戻ってきて。ようは、病気で寝込んだ峰山さんに話さずに、買い物に行こうとしていたってことだよな。」
呆れながらも、彼女の言っていたことをまとめる。

「そういうこと。私としたことが、不覚。これじゃあ、何のためなのか、わからない。」

思いつきり、落ち込んでいた。

「落ち込んでいる場合じゃなくてえ……。でも、心配だよな。留守中、どうしようか。」

なんだか、よくわからない世界に飛べこんで行きそうな彼女をほっておくとして郁は留守中、峰山の容体が急変したらということを考えていた。こういうときに、誰かがいてくれたら、ありがたいのだけど。はたして、このマンションの住人にいたのだろうか。頭を

ひねって考えてみる。

「あつ。」

郁は何かひらめいたようだ。

「いたいた。年がら年中、マンションにいる人。」

彼に頼もう。

そうと決まれば・・・。

すたすた歩き出した郁に今まで妄想の世界に入っていた彼女は、眉をひそめる。

「おいつ。どこ行くんだよ。」

あわてて郁の後に付いていく。

「あつ。やっと、気が付いてくれたんだ。心配だったんだよー？もう、こっちに帰ってこない気がして。その間、それはもう、一生懸命に留守中の峰山さんをどうするか真面目に考えていたんだから。」

郁は、振り向かず、答えながら下の階に通じる階段を降りる。

「とりあえず、春日にでもまかせようかなと・・・。」

ピンポン

説明すると、ここは彼女と郁が住んでいた3階の下の階。つまり二階という事になる。

ガチャ

出てきたのは、黒髪の少年。外見は、中学生ぐらいだろうか。彼の名前は、星野春日。女みたいな名前だが、断じて違う。立派な中学二年の男子生徒である。彼の特徴といえば、首からホワイトボードをぶら下げ、右手には黒いサインペンが握られていた。なぜなのか今の段階では分からない。まあ、そのうち明らかになる。彼は眠いのか、はたまた不機嫌なのか、何とも言えない表情で彼女達を見ていた。

「春日。お願いがあるんだけど・・・。」
郁は今までの事を説明した。

「・・・って、言う事なの。峰山さんは風邪で寝込でて一人にするわけにもいかないでしょ?」

この状態だと、郁がどのように春日に説明したのかは、わからないが、まあここは、これをいままで読んでいた人の想像におまかせしよう。

ここで、春日は何かを言うのかと思ったら、ホワイトボードになにやら書き始める。彼曰く、『・・・それは、大変な問題。峰山さんに日ごろの感謝をこめて何かしたいのはわかるけど、ほっとくのは、まずい』と。

「そう。だからね、ようは一人にしなかったらいいわけなの。だからね。春日、あんたにその役目を頼もうと思って・・・。」
ここに。

郁は、普段、双子の片割れ以外にはおっとりとしているが、時々とんでもない、はたまた厄介な事を思いつき、振り回す。いつけん、純粹そうな微笑みに見えるが、それは、小悪魔な微笑みではないの・・・と、これ以上好き放題に書いていたら彼女の機嫌を損ねることになるので止めておくが。

「ちよつとの時間でもいいんだ。お願い。」
彼女も、真剣な顔つきで頼んだ。

春日は、彼女の表情を見てホワイトボードに書きだした。彼が書いたものは、『・・・ちよつとの時間なら、いい。僕だって、普段お世話になっているし。』と。

「ほんと?ありがとう、春日。留守番よろしくね。」
こうして、半ば強制的におしつけて、買い物に行くことになったのである。

彼女達がスーパーに行き、買い物をしている頃、物語は打って変わり、なぜか隣町に移り変わる。メインストリートでは、部活帰りであろう学生たちの姿や休日を楽し

しむ親子ずれといった人々で賑わっていた。それをメインストリートから離れたビルのおく上から望遠鏡を持ち、眺める姿があった。

「つまらんなあ・・・。どこも人、人、人。」

その姿は左右対称に赤と緑で統一されていて、上から道化師が被るような帽子と上、ショートパンツ、尖がったショートブーツ。そして黒色の髪と瞳。瞳に関しては光に当たると少し茶色い感じがする。格好的には、まさしくサーカスで活躍してそうな道化師である。彼は一変、外見からは女性でもいけそうな気がするが男である。

「本当にこんな人通りが多い中、見つかるわけ？無理でしょっ。」

はあっと、ため息をついたのは、上から黒頭巾と白いリボンと夜の風景が描かれているワンピース。最も特徴的なのは、黒頭巾から飛び出したウサミミと、尻尾。これは、飾りではなく、本当に生えているのである。実は、黒頭巾には、穴が空いていてそこからウサミミが突き抜けている。本人曰く、別に萌えキャラになりたいわけではないが、ウサミミと尻尾に関しては、生まれつき。つまり、どうしようもない。まあ、以上のこの場所に似つかない怪しい道化師と、ウサミミ少女のコスプレ二人組であるが、本人たちは別にこれが普通の格好でもあり普通である。なんせ、これを書いた人間の表現不足があるので、この怪しい二人組に関しては、読者の自由な想像におまかせする。言っておくが、先ほど出てきた死神には全く関係がない。

「わかっているのは、このあたりに住んでいるという事。あの使用人め、うまいこと隠したなあ。」

彼らは、とある名家で雇われている秘密にこっそり活動している部隊の構成員である。道化師の格好をした彼の話から、ある人物を探しているようである。

「ねえ、ジョーカーちゃん。やっぱり、あの時、殺しておけばよか

ったね。なんで、逃がしたんだろっ？？あの・・・雨宮の小娘。」

「いやー。いっぱい、買えたねえ。」

さて、謎の怪しい二人組の意味ありげな発言は、これからの物語にどう影響するのか知らないが、物語は再び、彼女達に移る。

作者が彼らのシーンを意味もなく書きたかったために買い物中、何があったのかはわからなかったが、野菜や肉といったものが入ったスーパーのビニール袋を抱えている所を見ると、買えたようである。彼女達は、マンションに帰る途中である。

「どうみても、買すぎじゃないか？これ？」

あまりの量の多さに、疑問を抱く彼女だったが、

「まあまあ、何日かは保存できるし、当分、食糧にはこまらないよ。きつと。」

果たして、そういう問題なのか？は、わからないが郁はちゃんとこれからの事も考えて買っているのではなにかなるだろう。

「たしかに、これで買い物にはしばらく行かなくていいし、なんとかなるかも。」

数々の疑問を残しつつも、二人はマンションに向かって歩き出した。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0209h/>

reko-do

2010年10月10日22時19分発行